

巻頭言

「生きる力」と知識・技術

小川 剛

近年、文部省は、子どもたちの「生きる力」を重視した教育のあり方を示し、それによる学習指導要領の改訂を行った。これは、

これまでの教育の大転換を示すものである。

さらにいえば、それは、これまで教育投資論にもとづく学校の選別機能の強化、現代の科

学技術の進展・経済の国際化に応ずる人材の確保とを重視する教育の破綻を示すものである。

私なども、外国人から、海外で活躍する日本人の魅力のなさを聞かされることが多い。

外国語でのビジネスには熱心であるが、教養

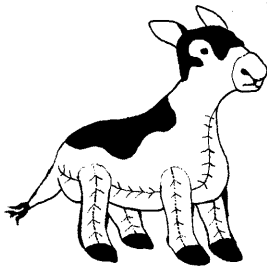


の狭さからくる話題の少なさ。外国語学校で習った決まり文句以上のことをあまり語らず、ビジネス以外の話題は、ゴルフとカラオケ。文化的に尊敬できないという。

世界経済の重要な一環を担う日本人が、教養に乏しいビジネスマンにすぎないということとは、悲しい。教養は、人間としての内的な要求に促されて、何事も忘れて、ある文化的な事柄に打ち込んだ生活のなかで培われてくるものである。そしてそれはその人に人間としての豊かさ・幅を与えてくれる。現在の学生も含めて、産業・経済活動の第一戦で活躍されておられる方々の中には、客観的な知識・技術の詰め込み教育に追われてきたためか、話題の幅の狭い人が多いように思われる。たしかに人間的魅力に欠ける人が少ない。

文部省も、そのような「現実」に気付いたのであろう。広い視野のもと、多くの人びとと交流しながらも、全体的な利益のため自主的に判断し、行動する人間の形成。そのようなことを意図して「生きる力」を主軸とした

学力の形成の必要性を感じたのであろう。「生きる力」の形成、これは幼児教育の原点である。それは幼児同士の遊びを通して実現されるものである。「遊び」これは幼児教育





を構成する主要素である。遊び自体は、子ども
の自発性にもとづくものであり、また自由
に想像力を飛翔させる創造の世界でもある。

また子ども自身が独力ではできないことを一
定のルールにしたがつて他の幼児たちとのつ
ながりのなかで実現していく成就感を味わせ
てくれるチャンスである。このように「生き
る力」の原点は、幼児教育の「遊び」のなか
に見出される。このようなことを蔑ろにし
て、幼児期から客観的な知識・技術の賦与を
売り物にしている幼児教育施設の存在に悲し
みというより憤りを覚える。

たしかに知識・技術の習得なしには、豊か
な生活は築きえないであろう。しかしわれわ
れは、無意識のうちに年齢相応の知識・技術
を身につけている。それを意識的に行おうと
するならば、「生きる力」の基盤の上に、そ

れをさらに強化する営みともに行われる。こ
とが望ましい。知識・技術の習得は、その子
が、その事柄に興味・関心をもち、その習得
のため積極的に取り組むとき、比較的容易に
行われる。物事に好奇心をもつ、自分に納得
のいくまでその事柄の習得のため積極的に取
り組む。これも「生きる力」の一部である。

幼児教育は、将来、人間として自分の能力を
十分に発揮して生きていけるようにすること
に重点を置くべきだと思う。幼児の知的発達
を重視した客観的な知識・技術の習得には、
賛成できない。それは子どもの「勉強嫌い」
を促すだけのよう思われる。

(お茶の水女子大学)